

~~~~~  
研究ノート  
~~~~~

大衆の時代の『ヘンリー五世』

狩野良規*

『ヘンリー五世』(1598-9 年)は、シェイクスピアが書かざるを得なかった芝居である。だが、このイギリス文学史上に燦然と輝く愛国劇を、沙翁^{さんぜん}はどういう気合で執筆したのか。

シェイクスピアはテューダー朝の王朝叙事詩たるバラ戦争を扱った4部作——『ヘンリー六世』3部作と『リチャード三世』——でデビューし、それらが大ヒットして、一躍人気作家となった。その数年後、彼がものしたイングランド史劇は、歴史をさかのぼってバラ戦争の遠因となった、ヘンリー・ボリングブルックがリチャード二世から王位を篡奪するクーデター事件に取材した『リチャード二世』。映画「スター・ウォーズ」シリーズでいえば、エピソード1ってところだ。そしてヘンリー・ボリングブルックが国王になってからの物語『ヘンリー四世』がエピソード2、さらにジョージ・ルーカスが1977年に監督したシリーズ第1作につなげるべくエピソード3を撮ったように、シェイクスピアもまたヘンリー四世の息子にしてヘンリー六世の父親、ヘンリー五世の治世を描かなければならないことは、筆を取るかなり前から覚悟していたであろう。

その勇猛果敢な名君の物語、アジンコート^{アジンコート}の戦場でフランス軍を撃破する愛国劇を、シェイクスピアが何を思いながら綴ったのか。そもそも理想的君主の活躍する英雄談など、あまり劇作家の興味をそそるものではないだろう。シェイクスピアしかり、彼が取り上げる王侯貴族や国家のリーダーたちに、ほとんど出来のよい人物はいない。脆弱で統治能力を疑われるリチャード二世やヘン

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

リー六世、前国王の死に責任を感じて苦悩するヘンリー四世やマクベス、やりたい放題暴れまくる極悪非道のリチャード三世、権力を無思慮にも娘たちに譲ってしまって転落するリア王、嫉妬に狂って判断を誤るオセローやレオンティーズ、計算ずくのエジプト女王の色香に迷うアントニー、自らの行動力のなさに自殺まで考えるハムレット……と、まあ、賢いと言えるのは、せいぜいがミラノ大公の地位を奪われながらも魔法の力で無人島を統べるプロスペローくらいであろうか。

つまり詩人は、高貴かつ清廉であるべき支配者たちの裏側の心情、矛盾する性格、複雑な人間性を、これでもかこれでもかと描きつづけた作家である。その沙翁がヘンリー五世に関してだけは、ちょっと気合が違う。

そこで、この例外的な歴史劇をめぐる昔からの批評は、ヘンリー五世の中に理想的な名君を見るか、それとも戯曲の行間にシェイクスピア一流の皮肉を読み取るか、両陣営に分かれて相譲らず。どちらかという、英文学研究者には後者の説をとる人が多いだろうか。

さて、『ヘンリー五世』を戯曲文学として読んだ場合は、むろん諷刺やあてこすりが散見される。けれども、それを前面に押し出して舞台化できるかどうか。

沙翁テキスト批評の碩学^{せきがく}ドーヴァ・ウィルスンは、第一次大戦が始まった第一週にストラットフォードで「アジンコートアジンコートの叙事詩劇」を見た時の興奮を、決して忘れられないと語っている¹⁾。また、ローレンス・オリヴィエも第二次大戦中に監督・主演した映画『ヘンリー五世』(1944年)では、ヒトラーを迎え撃つイギリス軍よろしく、高らかに国威発揚のラッパを吹き鳴らした。そりゃ、

1) ジョン・ドーヴァ・ウィルスン『シェイクスピア真髓——伝記的試論——』小池規子訳、早稲田大学出版部、1977年(原著1932年)、p.130。ドーヴァ・ウィルスンといえば、彼が編集した赤い表紙の、ペーパーバックのケンブリッジ版シェイクスピア全集は、大胆な解釈の注釈、ラディカルなパンクチュエーション、そして文学者肌の彼が書いた序文はとってても歯ごたえがあって、学生時代にずいぶん苦勞して読んだ記憶がある。なつかしいなあ。

そうだ。もともとこの作品は情報大臣から頼まれて制作した国策映画、そうせざるを得ない事情があった。

しかし面白いのは、ヘンリー五世はまさにはまり役と思えるカリスマ的な俳優のオリヴィエが、当初はヒロイックな芝居に背を向けようとしたという話だ。俳優仲間のラルフ・リチャードソン²⁾にヘンリー五世について聞くと、彼は「ありゃ、ボーイ・スカウトの隊長さ」とうんざりした口調で言った。舞台の稽古が始まると、オリヴィエはヒロイズムに抵抗して調子を下げた。だが、どうもうまくいかない。すると、ふだんはほとんど彼にダメ出ししない演出家のタイロン・ガスリーが英雄的に演じてみせ、「こんなふうに分もいい気持でやらなければ、とても客をつかめないよ」と語った。それで吹っ切れた。以来オリヴィエは「大アリア」に取り組み、「英雄的な演技もできる俳優」として有名になり、後年の映画でも雄々しくヒロイックに演じたというのである³⁾。

もっとも、オリヴィエの映画を戦時体制の中で制作された硬派でマッチョな作品と勘違いしてはいけない。映画の歴史が始まって半世紀、シェイクスピア映画も数限りなく作られたが、それらはほぼすべて見るに堪えない駄作ばかり。ところがオリヴィエによって突然、史上初の本格的なシェイクスピア映画が世に送り出された。映画は演劇に比べてはるかに芸術的に劣る、労働者階級の娯楽とみなされていた時代に、彼はシェイクスピア劇という「芸術」を、さまざまな階級の人々に楽しんでもらえる「国民文化」に昇華させた。

大衆の時代のシェイクスピア劇の幕開きである。

オリヴィエの演技は男臭かったが、監督としての彼の手腕は実に繊細だった。冒頭はミニチュアの模型でテムズ川沿いのロンドンの風景を捉え、1600年当時のグローブ座の様子を活写する。ややコミカルに、かわいらしく沙翁の時代の演劇状況を映す。そしてたっぷり30分間、シェイクスピアなど見たことがない

2) ラルフ・リチャードソン(1902-83年)はオリヴィエより5歳年上の、さまざまな役柄を達者にこなした名優。シェイクスピア映画なら、オリヴィエ監督・主演の『リチャード三世』(1955年)でリチャードの側近バッキンガム公に扮している。

3) ローレンス・オリヴィエ『演技について』倉橋健、甲斐萬里江訳、早川書房、1989年(原著1986年)、pp.82-86。

観客をシェイクスピアの過剰なことばに慣れさせてから、映像の世界へと移行する。

だが、グローブ座を離れた後も、装置や衣裳はどこかおとぎ話風。オリヴィエは中世の物語本の挿絵を参考に、意図的に古めかしくて人工的なセットで撮影したという⁴⁾。それが沙翁の詩と合うんだ、と。なるほど、ユーモラスな背景やセリフまわしや場面展開があつてこそ、ボーイ・スカウトの隊長が凜と^{りん}した姿に見えてくる⁵⁾。

オリヴィエの『ヘンリー五世』は、スターリンに依頼されてエイゼンシュテインが撮った『イワン雷帝』(1944-46年⁶⁾)と並んで、第二次大戦が生んだ、国威発揚映画を越える芸術映画だと、僕は高く評価している。

シェイクスピアの魅力はなんといつてもその詩行にある。沙翁は詩作品として読むか、それとも舞台上で上演されるものとして捉えるかとしばしば議論されるが、僕にとっては両者は別ものではない。つまり、イギリスの俳優たちは詩を語る訓練を若いころに演劇学校で徹底的に受けている。だから、シェイクスピア劇は舞台上で役者が朗じる詩を聴くもの——と、僕はそう考えている。

となると、よく引用されるのが『ヘンリー五世』の冒頭、「おゝ、詩神ミューズよ、創造の最も輝かしき天頂にまで炎を噴きあげるあなたの力を貸してほしい、舞台には王国を、演じる役者には王侯貴族を、そして壮大なシーンを見つ

4) 同書, pp. 252-254.

5) ローレンス・オリヴィエ, また次に述べるケネス・ブラナーの映画に関しては, 拙著『シェイクスピア・オン・スクリーン』, 三修社, 1996年, 第6章第3節「イギリス人ご自慢の英雄叙事詩——オリヴィエの『ヘンリー五世』」および第4節「英雄なき時代の英雄劇——ケネス・ブラナーの『ヘンリー五世』」で一度論じている。本節にももの足りなさをお感じの方は, ぜひそちらを読まれたし。

6) ヒトラーと死闘を繰り返していた時期に, スターリンは16世紀に初めてロシアを統一したイワン雷帝の伝記映画をエイゼンシュテインに要請し, 国家の強きリーダーとしてのイワンを自分とオーバーラップさせようとした。エイゼンシュテインはスターリンの思惑に乗り, 第1部では豪胆な雷帝の姿を描いてスターリンを喜ばせたが, 第2部では一転英雄の鬱屈した内面を銀幕に映して, 独裁者を激怒させた。拙著『続ヨーロッパを知る50の映画』国書刊行会, 2014年, 第3章第9節「セルゲイ・エイゼンシュテイン『イワン雷帝』」をご笑覧。

める観客には君主たちを……この闘鶏場のごとき芝居小屋に広大なフランスの戦場を収めることができるだろうか？ またはこのO字形の木造小屋にアジンコートの空をおのの慄かせたおびたしい数のかぶと兜を詰めこむことができるだろうか？」と唱える有名なプロローグである。グローブ座の裸舞台では、アジンコートの合戦シーンはほとんど再現不可能。だから、詩神ミューズの力を借りて、観客の皆様の想像力に訴えるしかありません。と、これはシェイクスピアの本音であったに違いない。また、ことばしかなかったからこそ詩文学として超一流の作品が創造できたのもたしか。

ケネス・ブラナーが監督・主演した『ヘンリー五世』(1989年)で、この絶品プロローグの前口上を朗じたコーラス序詞役はデレク・ジャコビ。暗がりの中で彼がシュッとマッチをす擦り、“O for a Muse of fire”と。ほほう、詩神の炎ってか！ 小道具を実にうまく使う。ほどなく照明のスイッチが入ると、そこは撮影所の倉庫。ジャコビが機材の間を歩きながらプロローグを高らかに謳い上げると、気分は一気に戦乱の世へ、風雲急を告げる。

オリヴィエは芝居がかったユーモラスな調子で、いちげん一見さんの観客の緊張をほぐしてから銀幕の沙翁劇へいざな誘った。一方、時代は下って平成元年のブラナーは、映画スタジオの裏側で開幕シーンを撮って、最初から「これは映画だぞ〜！」と主張した。すでにシェイクスピア映画を見慣れた観客を相手に、冒頭から緊迫感のあふれる映像を見せつけたわけである。

ブラナーはオリヴィエを尊敬しながら、常に彼の逆々をやった。オリヴィエが国民を鼓舞する頼もしきリーダーを体現すれば、ブラナーは街を歩けばそこいらへんにいそうな若者として登場する。王冠をかぶらず、自信もなさそう。えっ、彼が王様?! その現代的な、ごくふつうの青年が、フランスとの戦争を経験して人間的に成長していく姿を追う。

オリヴィエのフランス軍はどこか滑稽で軟弱そう、対してブラナー映画では格上で、しかもフ・ァ・ッ・シ・ョ・ナ・ブル。現代のフランス人のイメージどおり！そしてフランス王は、僕がいちばん好きな英国男優ポール・スコフィールド。渋い、うまい、ブラナーなんかヒヨッコに見える。

だが、プラナーはアジンコートで、5倍の敵にひるむ将兵を必死で励ます。何で俺が、と言うなかれ、将来「俺はあの日、あの場にいたんだ」と語ってうらやましがられる戦いをしようぜ、俺たちは幸福な少数だ、と。題して「聖クリスピアンの日の演説」(4幕3場)。プラナーという役者、見てくれは童顔の冴えない男だが、セリフをしゃべらせると、うまい、うまい！脱帽。

で、終幕は英仏の和平条約が成立し、プラナーは王冠をかぶり、名優ポール・スコフィールドと二人並んで、おゝ、対等に見えるじゃないか。国王として、役者として。やってくれるねえ。

時代は21世紀。ニコラス・ハイトナーがナショナル・シアター(National Theatre, NT)の芸術監督(在2003-15年)に就任して最初の演出作品に選んだのは、『ヘンリー五世』(NT, 2003年)だった。時あたかもイラク戦争の開戦直後⁷⁾。トニー・ブレア政権が米ブッシュ大統領と共闘してイラクへ攻め込み、ロンドンの街は戦争反対のムードに包まれていた時期に初日の幕が開いた。

ハイトナーのシェイクスピア劇で毎度おなじみなのは、戯曲の中にリアルタイムの今を読み解いて、それを舞台上に呈示する芝居作りである。『ヘンリー五世』は、迷彩服に機関銃の将兵たち、報道カメラマンも従軍して、イラクとおぼしきアジンコートの情景を見せつける、いかにもハイトナーらしい現代版沙翁劇。新芸術監督はまず各幕の冒頭にある口上を政府の公式見解と観客に想像させ、その一方舞台では戦争の残酷な実相を見せつけた。語られることばと現実のギャップ。さらに、巨大なスクリーンやテレビでメディアが伝える戦闘場

7) 2001年9月11日のニューヨーク同時多発テロ後、アメリカ(を主力とする)軍はその首謀者ビンラディンの首をとるべくアフガニスタンに侵攻(同年10月)、さらにイラクが大量破壊兵器を保有する(後に存在しないことが判明)との理由で、サダム・フセインを倒すべく2003年3月、同国になだれ込んだ。NTの『ヘンリー五世』は開戦3日前にリハーサルを開始、約2カ月後に初演。なお、イギリスではブッシュと共に戦争を主導したトニー・ブレア首相に批判が殺到、日本なら“犬”と呼ぶところだが、もっと具体的な言い方を好む英語国民は「アメリカのスピッツ」、 「ブッシュのブードル」と罵声を浴びせた。アメリカに同調したのが保守党ならまだしも、労働党政権だったことが、今日に至るまで英国のリベラル勢力の深いトラウマになっているとか。

面を映す。これも肉眼で見る戦争といかに異なるか⁸⁾。

そしてヘンリー五世には黒人俳優エイドリアン・レスター⁹⁾を起用した。オリヴィエは信仰心に厚かったといわれるヘンリーを、ナショナル・ポートレート・ギャラリー国立肖像画美術館にある有名な肖像画と同じ、僧侶のようなおかつば頭の国王として演じた。ブラナーはそれを意識して、現代の大衆的で平凡な兄ちゃんのヘアスタイル。だけど、エイドリアン・レスターとなると、丸刈りの黒人だけ。傭兵隊長のオセローならともかく。いくら多人種、多文化の時代だったって、イギリス人ご自慢の名君をわざわざ黒人俳優に演じさせるか?! あゝ、異化効果。NTにはずいぶんと「ヘンリー五世は白人だ、英国と君主に対する冒瀆だ」という手紙が舞い込んだとか¹⁰⁾。

黒人国王は、精鋭からはほど遠いイギリス軍の兵士たちを叱咤激励し、軍規違反を犯した旧友バードルフは至近距離からピストルで頭を撃ち抜き、自ら国家の大義と実際の戦争の残虐性の間で揺れ動く姿を見せつける。また、フランスの王女キャサリンの英語学習のシーンは、ふつう緩急をつけるためのコミック・リリーフ息抜きの場としてユーモラスに演出されるのだが、この舞台では征服者の言語たる英語を王女が必死に学ぶ一場となっている。

こうした今の今の時代を反映させる舞台作りは、口で言うほど易しくはない。平凡な演出家がやると、いかにも取っつけたようになるのだが、ハイトナーは

8) 僕はハイトナーの『ヘンリー五世』は未見、断片的な映像しか見ていないので、この舞台に関しては薄水、ブルッ！でも、最近ではインターネットでロンドンの劇評が読めるようになったので、だいたいの様子はわかる。また、安田比呂志「『語り』と『行為』の対位法:ニコラス・ハイトナーの『ヘンリー五世』」(『飛翔』No. 27, 「飛翔の会」, 2004年)に大いに助けてもらった。あつという間に消え去る舞台芸術に関して、研究者が書き残しておくべき模範的な論文である。感謝!

9) 一言エイドリアン・レスターの肩を持っておけば、彼はNTの看板俳優のひとり。レスターはこの後、ハイトナーがNT芸術監督としての最後の沙翁劇『オセロー』を演出した際にタイトル・ロールを演じて、『ヘンリー五世』とともに現代の軍隊組織内部の人間関係を見せつけ、大評判をとった。拙著「両雄並び立った『オセロー』」(『青山国際政経論集』第96号, 青山学院大学国際政治経済学会, 2016年 所収)参照。

10) DVD『ナショナル・シアター 50周年オンステージ』(NBCユニバーサル・エンターテイメント, 2018年)のDisc 2。NT 50年の歴史をたどったBBC制作のドキュメンタリーより。

若いころから一貫して古典劇を現代と切り結ばせて、そのセンスが抜群な演出家である。『ハムレット』（NT、2013年）では、耳にイヤホンをつけた警護官を人物たちの背後に立たせて、体制側とデンマーク王子のスパイ合戦を現代と共鳴させた。また、『ジュリアス・シーザー』（ブリッジ・シアター、2018年）の古代ローマは、アメリカの大統領選挙の党大会をオーバーラップさせる。けれどもハイトナーの“現代”は、単に観客の気を引く舞台の仕掛けにとどまらず、シーザーはトランプ風の^{ポピュリスト}大衆迎合家、ブルータスは大衆の心を動かせぬ学究肌のエリート、アントニーは「ポスト真実」のアジテーターと、戯曲の中にシェイクスピアは今日の作家ではないかと思いたくなる政治家群像を見だしている。

だがそれにしても、国立の劇団が、そして就任したばかりの芸術監督が、『ヘンリー五世』を上演してここまで国家の行なう戦争を痛烈に皮肉る芝居を打てるのはただ事ではない。公的助成金を受けている団体、また新たに大組織を任されたばかりの男がやる芝居がこれか。どこぞの国の芸術家とは気骨が違う、演劇風土も、見る側の意識も異なる¹¹⁾。

苦笑しながら見た、さらに危ない演出の『ヘンリー五世』は、BBCの連作イングランド史劇『空ろな王冠』（2012年）中の一編。ロンドン・オリンピックの年に仕掛けられた文化プログラム「カルチュラル・オリンピアド」の一環として、サム・メンデス制作総指揮（共同）のもとに作られたテレビ番組である¹²⁾。

11) この原稿を書いている時、『万引き家族』（2018年）でカンヌ映画祭の大賞を受賞した是枝裕和監督が、文化庁の助成を受けているにもかかわらず文部科学大臣との面会を辞退したとしてパッシングを受けていた。だが、イギリスでは芸術家が国家権力と距離を置くのはごく当たり前、また助成金も国家が芸術に介入しないようにと、中間にアーツ・カウンシルなる半民半官の組織を作り、そこから財源が支給されるシステムになっている。それでも金のことだ、いろいろあるはずだが、しかし日本みたいに理不尽な騒ぎの話は聞かない。健全！

12) この作品についても、一度書いたことがある。拙著「BBCシェイクスピア史劇『空ろな王冠』をめぐって」（『Aoyama Journal of International Studies』No. 3, 青山学院大学国際研究センター、2016年 所収）参照。

女流演出家テア・シャーロックは、この愛国劇を葬式の場面から始める。な
にっ、誰の？ 前王ヘンリー四世か、いや五世だ。葬列にプロローグがナレ
ーションでかぶさる。だが、高らかな英雄劇のそれにあらず。まるやかな、優し
げな、寂しげなジョン・ハートの声。棺桶の中のヘンリー五世は、人気者トム・
ヒドルストン。

そこから回想シーンとなり、ヘンリー五世が白馬を飛ばして宮廷に帰り、サッ
と王冠を受け取る、その軽さが笑える。権威なさそう。

シェイクスピアが芝居を書いたのは絶対王政の時代である。王権は神授され
たもの。沙翁に共和政の発想はなかった。有能で強靱な君主が統治する安定国
家がベスト。それが崩れれば、^{アナーキー}無政府状態に陥る。清教徒革命なんて、まった
く視野になかった。

そして戦争。イングランドはアルマダの海戦（1588年）に勝って天下を取っ
たのではない。むしろスペインの逆襲に^{おび}脅えて緊張する世相の中で、シェイク
スピアは動乱のイングランド中世史を書きはじめた。さらに前門の虎だけでな
く、後門の無政府地帯アイルランド。おそらく『ヘンリー五世』が初演され
たであろう1599年に、エリザベスの寵愛を受けた若きエセックス伯ロバート・
デヴルーが、1万7千の兵を率いてアイルランド討伐に向かった。女王の治世
中で海外に渡った軍隊として最大の兵力であった¹³⁾。

詩人は『ヘンリー五世』の第5幕のプロローグで、この時代の寵児に激烈な
エールを送っている。曰く、「身分は[ヘンリー五世に]劣れども皆に愛されて
いる、我らが女王陛下の将軍が、叛徒たちをその剣先に串刺しにしてアイルラ
ンドから凱旋すれば、いかに多くの市民たちが彼を歓迎するために町中に繰り
出すことでしょう」と。だが、当代の人気者はほどなく進退窮まって帰国し、
女王の信を失い、その1年半後クーデターを企てて未遂に終わり、断頭台の露
と消えた。

そんな^{ただけ}猛々しい時代、戦争は天災のごとく避けられない、あって当たり前の

13) J. E. ニール『エリザベス女王』大野真弓・大野美樹訳、みすず書房、1975年（原
著1934年）、p. 343。

凶事、そしてひとつ間違えれば一気に国家も傾く。詩人が史劇をものした当時の緊張感を想像すべし。

で、お話は21世紀の、議会制民主主義の、主権在民の、大衆の時代の演出である。強き英雄国王は旗色が悪い。テア・シャーロックは女性らしく(?)マッチョなカリスマ国王を拒否して、大陸に攻め込んだヘンリーを等身大に描こうとする。ハーフラー攻め(3幕1場)で苦戦する自軍の将兵たちに「もう一度突撃だ」と檄を飛ばす名ゼリフ、オリヴィエは、また彼とは逆々の演出を志向したブラナーも、馬上から格好よく叱咤したが、ヒドルストンはなんと白馬から降りてしまう。そして、膝をついて部下たちにチマチマッと語りかける。ヘッヘッヘッ、どうして名場面をわざわざ矮小化するの?!

映像作品である。やろうと思えばいくらでもスペクタクルにできるアジンコート(アジンコート)の戦闘シーン、だがカメラはアップが多く、なんか迫力がない。また、ヒドルストンのセリフも、部下たちを激励しながら、自分のことばの真实性を疑っているかのよう。

この演出で演じる王様役は難しい。自らの権力を疑う、中途半端な、元気がない、やり損なヘンリー五世。しかし、それをいつもはスカッと格好いいトム・ヒドルストンが素知らぬ顔して演じている。僕はこの作品の国王にではなく、非英雄的な国王に徹したトム・ヒドルストンのプロ根性に感じ入った。

ラストは冒頭の葬儀のシーンに戻り、エピローグが流れる。ヘンリー五世の世は短命に終わり、六世が幼くして王位に就き……僕は『ヘンリー五世』のプロローグは学生時代から鼻歌のように口ずさんでいたが、このエピローグはエピソード3から最初の史劇へのただのつなぎくらいにしか考えていなかった。だが、口上をナレーションで語っていたジョン・ハートがここで姿を現し、エピローグの最終行を包容力あふれる声で朗じた時、名君の短くも苦い治世がみごとに解毒されるのを感じて、戯曲の終幕をあらためてじっくりと読み返した。

いいなあ、オリンピックという国家行事に国营放送のBBCがぶつけた英雄談が、こんなに苦渋に満ちた「空ろな王冠」の物語というのは。僕の愛するイギリス人のひねくれた根性を、2020年の東京に求めるのは無理な話であろう

が。

さても、シェイクスピアの気合やいかに？——そりゃ、愛国劇だ、間違いない。沙翁には君主政以外の選択肢はなかった。だが、善王のことも、他の歴史劇の人物たちと同様にぶっ叩かないではいられなかったのが、作者の性分というやつだ。これも間違いない。けれども、名君の不出来で不完全な部分を、大衆の時代の舞台でこれだけ敷衍^{ふえん}し拡大して見せられると、それはそれでこの芝居の基調とは異なるだろう、と。

シェイクスピアは草葉の陰で苦笑いしているか、それとも、「ほほう、21世紀の大衆社会では俺の描いた英雄は否定されているのか」と喜んでいるか。詩人を感じさせる舞台、いや英雄不要の、真の民主主義社会の実現を期待したいところではある。 (2019年1月 脱稿)